

# 大平街道と大平宿チャリンコ走行記

## 2013(平成25)年5月5日(日) 快晴

5月12日のスーパー恵那山ツーリング部門の下見に行ってきました。参加される方の参考になればと思います。



今日は輪行です。

朝5時40分、自宅発。JR鶴舞駅6時5分着。

6時41分発の中津川行き普通に乗車。

10両編成で、朝早いこともあり、車内はがらがら。

JR中津川駅で南木曾行き普通に乗り換え、8時29分南木曾駅到着。

本日の相棒ビアンキ・シクロクロスで、8時50分、駅前スタート。



妻籠宿までは国道19号を通過して、町営第3駐車場まで4.2km。

妻籠宿は観光客で賑わっていました。

本番では、馬籠宿、馬籠峠を経て妻籠に出ます。

国道256号線を上ります。

車がよく通ります。

途中、サイクリスト2人と行き交いました。



日帰り温泉『木曾路館』前。ここまで、7.9km

このまま国道256号線を直進してもよいのですが、ゆっくり走ろうという方には、この三叉路を右折し、すぐに左折して旧道に入ることをお勧めします。

旧道には風情があり、坂道であることを忘れさせてくれます。

それに、国道にはトンネルがあり、勾配もきつく、交通量が多いです。

でも、純粋に速く走りたい人は国道の方がよいでしょう。旧道は生活道路なので、速く走ると急に飛び出してきた人と接触する可能性があります。



旧道にある『蘭郵便局』。

「あらぎゆうびんきょく」と読みます。

この日は日曜日でこどもの日なので休業日です。

郵便局というと、サイクリング協会の新美さんが思い浮かびます。新美さんはこの郵便局でも千円貯金をしたのでしょね。

新美さんの郵便局巡りは、『こぐこぐ自転車』や『自転車ぎこぎこ』の著者で作家伊藤整の次男・伊藤礼氏の本でも紹介されていました。



旧道では、この『本谷橋』を渡ります。

旧道には路線バスが通っています。1日5便のみですが。

「幸助」という駐車場を過ぎると、まもなく大平（おおだいら）街道です。



国道256号線との交点。13.5km。

ここから大平峠を目指しての大平街道（長野県道8号飯田南木曾線）が始まります。



大平街道は冬期閉鎖となり、この扉（柵）が閉じられます。

約5km上りが続きます。

神坂峠よりは傾斜は緩く、道幅も広いと感じました。

路面状況も比較的良好です。

ツーリングのオートバイがよく通りますので注意しましょう。



標高1226mにある、天空の茶屋と言われる『木曾見茶屋』です。

19.0km地点。11時ちょうどに到着。

お昼には少し早いので、帰りによることにしました。

（帰り、12時40分～13時15分入店）

街道自体が冬期は閉鎖されますので、当然冬期は営業していません。

今年は土日祝日のみの営業だそうです。それも女将の都合で休業になることも。

この日の店内は、ハイカーやドライブでやって来た人で、とても賑わっていました。

創業1932年（昭和7年）、大平峠にボンネットバスが走っていたころの当時のしのぶ白黒写真が店内には飾られています。晴れていたもので、店の中からも遠くの山々を見事に見渡すことができました。



おでん1人前（3本）450円を注文。

真っ黒な玉子とコンニャクがでーんと串に刺さっていました。真ん中の1本はコンニャクと昆布です。昆布だしの香りが漂い、コンビニのおでんに比べたら遙かに美味しかったです。

他に、五平餅1人前（3本）570円（1本だと200円）、山菜蕎麦650円、山菜月見蕎麦など、至ってシンプルなお品書きでした。

店の横には、斎藤茂吉が「麓にはあらぎという村ありて 吾にかなしき名をぞ とどむる」と詠んだ句碑が立っています。展望台もあります。



歴史を感じさせる大平街道の石碑が建っていました。



木曾峠（隧道）

高さ3.3mの通行制限があります。

トンネルの上に山はなく、採光を取り入れる穴が開いていました。

ここまで20.9km

ここから大平宿までは下りです。

大平街道は、江戸時代中期（宝暦4年）、伊那谷と中山道の妻籠宿を結ぶため、飯田藩によって建設された街道です。

それまで木曾谷へ行くには、伊那市の権兵衛街道を経て奈良井宿へ行くルートしかなく、木曾山脈を南へ大きく迂回しなければ妻籠宿へ行くことができませんでした。この街道の開通により、最短距離で妻籠宿へ行くことが可能となりました。

現在は、飯田市中心部の三州街道（現・国道151号線中央通り三・四丁目）を起点に、長野県道8号飯田南木曾線、飯田峠と大平峠（木曾峠）を経て、木曾郡南木曾町南部の吾妻保神地区で国道256号線となり、南木曾町吾妻地区で中山道（旧中山道）と合流する街道となっています。

今回のツーリングコースでは、平坦な道はありません。基本的に往路はヒルクライム、復路はダウンヒルと、プチグランfondのようなコースです。

雨だと、とても危険だと思います。



11時35分、大平宿（おおだいらじゅく）到着。25km。

観光地化された妻籠宿とは、まったく趣が異なります。

江戸時代の宿場の遺構といった感じでしょうか。こんな場所が残っていたのか、と感動を覚えました。峠越えをしてやって来た価値があります。



大平宿は、長野県飯田市に存在した宿場町です。

中山道と三州街道（伊那街道）を結ぶ大平街道のほぼ中間地点、標高1150mの大平高原と呼ばれる山中のわずかな平地に建物が点在しています。

大平宿は、飯田藩により大平街道の通行を命じられた者や元善光寺参りの参拝者が滞在するようになり、文化年間（1810年代）には茶屋宿として栄えました。

明治になると、大平第三番小学正道学校や大平郵便局も設置され、長野県南部と周辺都市との交通や物流の要所となりました。明治42年、木曾に中央本線が全線開通すると最盛期を迎え、戸数70を超える賑わいを見せました。しかし、大正12年に伊那電鉄が飯田まで開通すると、それまで大平宿を通過して中央線を利用していた人々が減少し、さらに昭和30年代に清内路村（現阿智村）の清内路峠を越える国道256号が開通すると大平街道の交通や物流は減少の一途をたどったのです。また、高度経済成長によるエネルギー需要の変化により村の中心産業であった林業（炭焼き）が成り立たなくなり、昭和35年の戸数は全盛期の半数以下の38戸にまで減少し、昭和45年、住民の総意として集団移住を決定し、同年11月末、大平宿は約250年の歴史に幕を下ろしました。

しかし、現在、NPO法人大平宿をのこす会によってその維持が続けられ、この日も若いボランティアの手によって整備作業が行われていました。

映画監督の山田洋次氏は、大平宿を訪れ、

「ここには原風景がある。この原風景を次代に伝えよう」と語りました。

大平宿には店も自動販売機もありません。

飲食物の補給はできませんのでご注意ください。



公衆電話がありました。最初に300円かかり、以降100円ずつ必要となります。

その横には、宿場維持のための募金箱が設置されていました。

リヤカーはボランティア人たちの作業用です。



いろいろのある広間がありました。当時は、いろいろを囲んで煮炊きをしていました。

今でも宿泊できるそうです。ただし、自炊で、布団もありません。

大平宿をのこす会では、「南信州いろいろの里」「利用することが保存活動である」として、利用者の文化程度に合わせて利用してくださいと呼びかけています。



比較的保存状態のよい宿です。数人いた観光客（見学者）の人に撮っていただきました。

12時15分宿場を出発、木曾見茶屋で食事後、南木曾駅14時42分発の普通電車で帰路につきました。

走行距離：50.6km、走行時間：5時間。